

## 編集室から

十月は、神無月といわれます。全国の神々が出雲に集い、一時的に居なくなるからだそうです。神々が集う出雲では逆に神有月という聞きましたが、裏づけはとっていません。出雲には他の月にも神がおわしますはずですから、十月だけを神有月というのも些か奇異です。

さて、ズバリお尋ねします。神様は居ると思えますか？...

科学者の端くれを自認している身として科学的により正確に言うと、神の存在は否定することも肯定することもできないのですから、「神は在るとも無いとも言えない」というのが、正しいはず。存在を否定できない以上、存在することは否定しない。ちょっと判り難いスタンスですね。

そんな中、遺伝子研究の世界的権威の一人である村上和雄先生（筑波大学名誉教授）は、「遺伝子の成り立ち・振る舞いを科学的に分析するほど、その結果は奇跡的に希少な確率となり、何者か偉大なる存在を意識せざるを得ない。」との思いから、その超存在のことを something great（偉大なる何者か）と表現されておられ、科学者としての深慮を感じます。

ところで、神仏に参詣する際、何がしかの願い事を意識的・無意識的にしているようです。一方で残念ながら、それが適うことは珍しいようです。これは何故でしょうか？例えば「お金がほしい」という願い事は、「お金が無い」事を前提にしています。一説によるとこの前提の方を神様は適えている為だそうです。

偉人伝を読んでも分かりますが、シンプルに信じ切ったことが適っています。それが正しいとなると、我々は日々の暮らしの中であまりにも当たり前として改めて考えもしない「無自覚の前提 = シンプルに信じきっている事」自体の再確認をする必要がありそうです。（は）



能登の夜市  
NOTO-NO-YORUICHI

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが経営する「能登の夜市（のとのよいち）」。最近、問い合わせを多く頂きますので、こちらに連絡先を記載いたします。

上京された際、ご利用になってみてください。毎夜能登から直送の酒肴に包まれ至福です。

もちろん、川畠さんご自身もお店に立っておられます。

能登の夜市：03-6417-9787  
17:00～23:30 日・祝日 定休  
目黒駅西口前。サンフェリスタ目黒B1F  
<http://notoyoru.jp/>

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2012/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)

2012/10

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

## 神無月



岩手県陸前高田にて被災後7ヶ月目の一本松彼の地のその後は、如何に気になっています。

by hama

## 寄稿『能登に想つ』

数馬酒造 専務 数馬 浩子

毎年、秋に酒蔵でコンサートを開催して今年で一四回になりました。

そのコンサートの際の方々がコンサートのトークの中で必ず「能登の方は皆さん本当にやさしくて、温かくてまた、能登は自然が一杯でとても癒されます」と能登の感想をおっしゃいます。一四回の半分以上はしらしみちよさんがいらしてくださいましたが、しらいさんが「能登の海」という曲を作ってくださいり皆で合唱していました。その曲がともきれいで能登に住んでいる私達も忘れていた「能登の海」の情景が浮かんできます。

また、酒蔵を訪ねて来てくださる方に「能登はのんびりしますね。なんだか時間がゆっくり流れている様な気がします。」と言われ、能登を訪ねた方々に能登の良さを気づかされています。

今年のコンサートに来てくださったバイオリストの方が「今年は当たり前の事が実は、当たり前前的事ではない事に気づきました。家族がいる当たり前のことが実はすごい事・大切なことだと気づきました。」と話されていました。その言葉にドキツとしました。私も能登に嫁いでいつの間にか

## 濱のつばやき 『複写』

先月紹介したNLP、神経言語プログラミング。その中には未だ、面白い知見が含まれている。

そのひとつに、「なりたいたい人になる方法」がある。誰にでも憧れの人や尊敬する人が居る。そんな立派な人になれたらどんなに良いだろうと思っても、なれる訳が無いからと大抵は諦めている。だが、それができるとNLPはいう。そんなバカなと学び始めると、これが意外にシンプルな原理であった。

今やコピー機の無いオフィスは無いと思う。コンビニにも備えられているから、コピー機を見たことが無い人も、ほとんど居ないはずだ。「コピー機の原理は簡単だ。原稿台に置かれた原本を写真撮影のように読み取る（スキャンという）。それを忠実に印刷すれば、複本ができる。NLP式なりたいたい人のなる方法も、実はこの原理と全く同じだ。まず、徹底的にやりたい人（対象）を観察する。一挙手一投足、しぐさ・話し方に至る全てを観察する。この時点で何処まで対象の細かな点まで気づき観察できるかが重要である。スキャンできなかつたものは、コピーできない。その気づき（微細観察結果）を元に、今度は自分でそれを再現する。つまり、なりたいたい人を演ずる。すると、他人からはなりたいたい人になって見えている。

このコピー術は、NLPが開発されるきっかけとなった「事件」と深く関わっている。当時コンピュータ学の学生だった開発者の一人が、著名なセブピストの研修を別

二七年。子供達も大きくなり少し余裕も出てきたのか当たり前の何気ない風景が、当たり前の自然が大切な財産だと気づきました。確かに東北大地震で被災された方々の事を思っても同じ事が言えますから・・・能登も過疎化・高齢化が進んでいますがおじいちゃん・お婆ちゃん達が特にやさしいそして、元気！ 自分達が出来たことを若いもんに一生懸命してください。きつと、こうすれば喜んでくれるのではないかと相手の事を思いながら行動してくださるのでしょうか。「おはようございます。どこ行かしてかいいね。氣い付けて」と挨拶に始まり一言があたたかく感じます。「能登はやさしや土までも。」の言葉通り私が出逢った方々は相手の事を思いやる方ばかりで、能登は何でも温かく受け入れてくれる心のおだやかな広さ、大きく包み込んでくれるような広さがあると思っています。私も年を重ねるたびに能登の良さ・能登人のやさしさを感じ、そんな中で暮らしている幸せ・有り難さに感謝しつつ能登を大切にし、能登の良さをお会いする方々に伝えていきたいと思っています。



【プロフィール】  
（かずまひろこ）富山県氷見市出身。三年間東京で勤務後、能登へ嫁ぐ。現在はお酒とともに能登のやさしさを伝えたいと頑張っています。

室で音声だけ聞き、徹底的に分析。それを真似て復元した。研修が終わりに出た問いに、正規の受講生は誰も答えられなかつたが、件の学生は見事に回答。賞賛を得たという。天才と言われた複数の「心の問題解決者」たちが無意識に実施していた手法を理論化・体系化することで、NLP自体が成り立っている。実際のNLPには、上手くできないときのために確実にスキャンとコピーするさまざまな手法が用意されているが、その全てに触れるには、他の有益な手法の学習も含め比較的高額な一週間のカリキュラムを受講せねばならない。

地域づくり・街づくりでは、同じ状況は二度と現れない。これが先進事例から学びを得ることを難しくしている。「あそこ、うちは違うから。」事例に触れても何も学ばない言い訳が、この一言になる。

一方で、事例をそのままコピーすると、やることは同じでも、まず上手くいくことは無い。諸条件が違いすぎるからだ。成功した他人の真似ばかりして右往左往しているのは、この類になる。

では、どうすればよいか？事例の本質を見極めることだ。事例の成功ポイントを一旦、本質・原理・法則レベルまで深掘して身に付け、そこから自分の現場に応用する。成功するためには、この手間を惜しんではならない。NLP自体も事例の原理化を極め、世界各地に広がった。わが国ではビジネス界への適用が始まっている。NLPが成功した原理・本質に気づけば、その適用範囲は無尽蔵なのかも知れない。

今回はいつもの地域ルポ形式ではなく、山下祐介『限界集落の真実』（2012年1月10日、筑摩書房）について紹介したい。山下（首都大学東京：准教授）は昨年3月まで弘前大学人文学部に在職され、青森県の過疎地域を中心として精力的にフィールドワークを行っていた社会学者（地域社会学、環境社会学）である。

限界集落については、1980年代に高知大学に在職されていた大野晃によって「65歳以上の高齢者が集落人口の半分以上を超え、独居老人が増加し、集落の共同活動の機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な状態に置かれている集落」と定義された。2000年代に入ってから限界集落論は市町村合併騒動や加速する少子高齢化と人口減少により注目されはじめ、さらに2008年に高知新聞をはじめ全国12地方新聞社の共同企画で刊行された大野晃『限界集落と地域再生』により、専門家のみならず広く知れ渡り、一般的に使用されるに至ったのではないかと思う。

筆者なりに山下の主張をまとめると、「近年の限界集落に関する報道は、あたかも過疎地で集落が次々消えるような印象を与えてきた。そして、限界集落は地域持続が厳しく、国や地方自治体などにより手を差し伸べてやらなければいけない大変な場所というイメージが作り出されてきた。しかし、現実には集落消滅はかなりの場合、よほどの特殊事情がない限り、そう簡単に生じるものでない。表面的なデータ解釈や乱暴な論理でなく、現実の過疎地域をそこに暮らす人の視点から理解し直そう」ということだ。筆者は「中央から周辺は見えてこない」と力説する。中央とは霞ヶ関に限らず地方にあっても、県庁所在地のような都市と県内の過疎地の関係についても同様のことが言えよう。限界集落に対する見方や認識を新たにするために、本書の一読をお勧めしたい。

また、本書では全国各地の過疎地域の現実が報告されている。青森県鱒ヶ沢町、秋田県藤里町、新潟県上越市・旧大島村、京都府綾部市などが取り上げられ、少子高齢化、人口減少が進展しつつも、もちろん楽観視はしていないが集落消滅という事態に至っていないことを実証している。これらの地域事例と記載スタイルとは異なるが、とりわけ注視した節は青森県下北半島に関するものであり、その地域性が明快に記述されている。以下、記載されている項目を示す。なお（）内の記述は筆者がつけたものである。1.過疎問題が凝縮された半島 2.むつ市の一極集中と郊外化 3.風間浦診療所にて（村唯一の医師の日常） 4.佐助川小学校の前で（半島両端の大間・東通原発効果が一番弱まった半島北部中央に出現した限界集落） 5.マタギのむら、畑（はた）の現実 - 共同売店の閉店 6.年寄りの暮らし、若い人たちの暮らし（生活利便性の低下と少ない雇用） 7.都市効果と原発効果 - 大間・東通

そしてこの節の最後を「下北の過疎・少子高齢化の実態は都市効果と原発効果でかなりのところ説明がつく。下北半島を支える雇用は、基本的には官公庁と自衛隊（むつ市大湊の海上自衛隊）、原発関連の下請け。逆にいえば自衛隊と公共事業があれば、地域社会は成り立つことでもある」と結ぶ。折しも原発関連施設の立地する下北半島4市町村は、9月21日、原発ゼロ政策見直しの要望書を枝野経済産業大臣に提出したが、ここに出さざる得ない下北の現実がある。注）敬称略。

この原稿を書いている9月24日は実は私の誕生日なんです。そして今年のひとつの節目である40歳に相成りました。最近耳にして感銘と言いますか、今後の生き方の指針なった言葉があります。松下幸之助氏の『人は40歳になったら自分の顔に責任をもて』です。その意味としては、「人は顔の美醜ではない、親から授かった顔かたちでなく、40歳の人生を生きた人の顔がある。人々の歩んだ職業や人生がその顔にはある、従ってその顔は自ら創り出したもので当然自己責任を持ってゆくべきだ」というものです。つまり40歳まででどういう生き方をしてきたか？ということが問われているわけで、その結果については責任を持ち、そして今後の人生への反省や糧としていく。40歳が1人の人間として自立しているか、社会的役割を果たしているかのチェックポイントの年齢ということなんでしょうね。

ですが私は拡大解釈をして『誰とも比較しない自分としての絶対的価値を見出す事』ことではと考えております。若い時は誰かとの比較による優性、劣性を評価軸としていたと思います。それは見た目だけでなく、学歴、成績、会社、役職、給料、彼女・彼氏等々様々です。しかし、自分の人生のミッション（生きる意味）を見つけ、それに向かって走ってしまうと、他人との比較がそもそも意味をなさなくなってきました。恐らく相対的評価ではなく、絶対的評価であり、他己評価ではなく自己評価であるからなのでしょう。

私の自己評価はどうなんだろう？確かに最近は白髪も増え、若干毛髪量も少なくなり、肌はくすみ、ハリもないわけですが“好き嫌い”というレベルで自分の顔を考えることはもう随分ないような気がします。きちんと言うならば、「責任を持つという大袈裟な意識の持ちようではありませんが、これはこれで納得している」表現が一番適しています。

最後に震災をはじめと様々な災害や争いによって、失ってしまった多くの命に報いるためにも、命ある限りよりよい社会と子供たちの幸せな未来のために邁進していきます。そして両親に感謝です。

『富士の国から ~大魔神のたび~』 寸又峡温泉開湯50周年記念フォーラム  
「若者が地域を変える」(その3) 静岡県職員 溝口 久

二人目からは静岡県の若者6人衆が続く。

一番手はNPO法人サプライズの飯倉清太さんだ。

修善寺を拠点とする「NPOサプライズ」の代表として、清掃や観光を中心に、伊豆を盛り上げようと活動を行っているが、伊豆に転居してきたばかり頃は、この地に対してまったく無関心だった。静岡市の両替町で生まれ、高校卒業後、沖縄、アメリカに留学。帰国後、1995年天城湯ヶ島町にある「浄蓮の滝」でジェラートの店を開店した。売り上げは順調に伸びていった。本わさびをつかったジェラートには辛さを3ランクに分けて販売したところ売れ行き倍増、欲を出して5段階にしたところ思わしくなかった。どうも3段階というのがいいようだ。他にも塩ジェラートを開発するなど、各地でジェラートをプロデュースしたり新店舗を出したりと大忙しで、地域と関わる暇などなかった。さらに、「鎌倉や東京に店を出したいな」と、気持ちは伊豆ではない他の方面を向いていた。

伊豆の地に足がつかないまま、仕事をこなす日々が過ぎていた。それを覆す出来事が起こったのは、2008年1月3日。

休憩時間にトイレに行った際、ゴミが落ちているのに気付いた。よく見ると、トイレだけでなく駐車場にもゴミが放置してある。これはひどいな、と携帯で写真を撮り、「まだ1月3日なのに、こんなにゴミを放置する人がいるとは」とブログにアップした。いつものように、軽い気持ちで。ところが、この記事にコメントがついた。「観光客のモラルが低い」「環境破壊だ」、きわめつけが「飯倉さん、がんばってきれいにしてね」と。

こんな反応は予想外だった。ゴミ問題を訴えようと思っていたわけではなく、ましてや「ゴミを片づける」なんて考えは全くなかった。

結局、それらのコメントによって、後に引けなくなり、掃除をしなければならなくなった。「ブログに書いておいて、自分では掃除しないの?」ということになるからだ。

「なぜ私がゴミを拾うんだ?」と思いつつ、店の従業員や道の駅のスタッフ、ログハウスのご主人などと「3月6日にゴミ拾いをする!」と、ブログで宣言した。

3月6日、6人で開店前1時間、浄蓮の滝から半径5キロを歩いてゴミを拾い、軽トラック1杯分のゴミを集めた。これをブログで報告したところ、ブ



ログ仲間が「当日は参加できないから、近所でやります」と沼津で仲間を募り、掃除してくれた。

「おもしろい」。そう直感した。ネットを通じて、だれかがそれぞれの町をきれいにする。しかも「一生懸命」ではなく楽しんで。これって、ネットだからできることじゃないか。清掃活動を始めて、自身が大きく変わった。以前は、地域と関わりをもとうとせず、地元の人に「静岡から来た」と言われるたび「閉鎖的だな」と思っていた。そんな地元の人たちの家の前のゴミを拾いつつ「こんなにゴミが落ちてるじゃないか」と思っていたが、ふと自分をかえりみたと「じゃあ、自分はどうなんだ?」と。自分も、足元のゴミすら拾えていなかったじゃないか。

伊豆が閉鎖的なわけではなく、本当に閉鎖的なのは自分だった。自分の心が周りを閉鎖的に見せていただけだった。閉鎖的な自分を取っ払って、地域ともっと関わろう。ゴミ拾いを通じて、そう思うようになった。

「早朝にゴミ拾いしてもだれにも会わないだろう」という理由で「影奉仕」と名付けたボランティアは、静岡県内17支部に増え、今も清掃活動を続けている。また、より多くの人に参加できるように、「100万人の清掃活動」のサイトを立ち上げた。参加者は何万人にも及ぶ。「ネット上でだれかがやっている」という仲間意識が人気で、国内はもとより、海外に住む日本人も参加している。

基本テーマは「デジタルを使ってアナログを作る」。デジタルはあくまでツール。それを使って人と人が出会う仕組みを作らなければならない。その意味で、この清掃活動はとても象徴的である。

そもそも、観光と清掃は一体である。お客様を迎えるとき、店周辺をきれいにするのは当たり前、「どうしたらお客様が伊豆に来てくれるか」。それが自分のなかで清掃と結び付いた瞬間だった。

ただ、国内旅行は1996年頃を境に、下降線をたどっている。特に20~30代が旅離れしており、ピーク時に比べて年間300万人減っている。インターネットや携帯電話の普及が原因ではないかと思っている。通信にお金と時間を使う分、旅行に行かなくなっているのだ。でも、本当に若者は動かないか。だって、ネットを通じて、多くの若者がゴミを拾ってくれた。これを観光に結び付けられないか、それで生まれたのが「ボランツーリズム」、ボランティアを目的とした観光である。それが、重要文化財の旅館「落合楼村上」を清掃するボランティアと宿泊サービスを組合せ、学生ボランティアにとっても宿にとっても得する仕組みだ。飯倉さんの「面白い」をまちづくりの形にする並はずれたセンスにただただ脱帽だった。(つづく)

